

〈翻訳〉

ゲオルギイ・イワーノフ『原子の分解』¹

宮川 絹代

落ちるのだ。私なら言うだろう——
舞上がれ、と。これは同じことなのだ。

ファウスト、第二部²

僕は息をする。もしかすると、この空気は毒されているのか？ けれども、これは、僕が呼吸することを許された、唯一の空気なのだ³。僕はさまざまなことを感じる、時にほんやりと、時に苦しいほど激しく。もしかすると、それらについて語るのは無意味なのか？ けれども、人生は必要なのか、不要なのか、木々がざわめき、晩が訪れ、雨が流れるのは気が利いたことなのか、愚かしいことなのか？ 僕は、周囲に対して、優越感と劣等感の入り交じった感覚を味わっている：僕の意識のなかで、人生の法則は夢の法則と固く絡み合っている。僕の目に、世界の展望がひどく歪んで映るのは、そのおかげに違いない。けれども、それは、僕にとってまだ価値のあるまさに唯一のもの、すべてを飲み込む世界の醜悪さから僕をまだ引き離しておいてくれる唯一のものなのだ。

僕は生きている。通りを歩く。カフェに立ち寄る。これが今日という日だ、僕のかげがえのない人生だ。僕はグラス一杯のビールを注文し、喜んで飲む。隣のテーブルにはバラ結びのリボンをつけた年老いた紳士がいる。こういう恵まれた年寄りたちは、抹殺すべきだと思う。——お前は老いているんだ。お前には分別がある。お前は家族の父だ。お前には人生経験がある。だが、ろくでなしだ！——くそくらえ。紳士は堂々たる風采をしている。これは高く評価される。なんとくだらないことか、堂々とした、とは。それは美しいとか、みじめなとか、ひどいとか、なんでも構わないのだが。いや、ほかでもない、堂々たるなのだ。イギリスでは、裁判官らを信頼させる堂々たる風采を持った偽証人という職業さえ存在するらしい。そして、信頼を呼び起こすだけでなく、その風采自体がつきることない自己満足の源なのだ。世界の醜悪さの特徴のひとつは、堂々としていることだ。

本質的に、僕は幸福な人間だ。つまり、幸福を感じる性癖の人間なのだ。これはそんなによくあることではない。僕は最も単純で、最も普通のものが欲しい。僕は秩序が欲しい。秩序が乱れているのは僕のせいじゃない。僕は心の安らぎが欲しい。けれども、心は混濁した汚水バケツのようだ——ニシンの尾、ネズミの死骸、かじりかけの食べ物、タバコの吸い殻が、濁った深みに潜ったり、表面に現れたりしながら、互いに追いかけて回る。僕は澄んだ空気が欲しい。甘みのある腐敗——世界の醜悪さの呼吸——が、恐怖のように僕につきまとう。

僕は通りを行く。さまざまなことについて考える。レタス、手袋……。角のカフェに座っている人々のうち、誰かが最初に死に、誰かが最後に死ぬ——誰もが一秒まで定められた正確な自分の期日に。ほこりっぽく、あたたかい。この女はもちろん美しいが、僕の好みじゃない。彼女はよそ行きのワンピースを着て、微笑みをうかべて歩いているが、僕は、彼女が裸で、頭蓋骨を斧で割られて床に横たわっているのを想像する。僕は、性欲と嫌悪について、サディスティックな殺人について、僕は君を永遠に失い、終わったことについて、考える。「終わった」——惨めな言葉だ。まるで、よくよく響きを考えてみると、すべての言葉が等しく、惨めで恐ろしいわけではないようではないか？ 意味の解毒剤は水っぽく薄まっていて、驚くほど早く効果を失い、その後には孤独の音なき空虚さが来る。けれども、惨めさと恐ろしさのなかに、彼らは何を理解したのか——言葉と意味を信じた彼ら、夢想家、子供たち、功なくして幸運を得た運命の寵児は！

僕はさまざまなことについて考える。そして、それらを通して、絶えず神について考えている。時々、神も、何千もの直接は関係ないものを通して、絶えず僕のことを考えているように思われる。光波、軌道、振動、引力、そして、光線のようにそれらを通して、絶え間なく僕のことを考えている。時折、僕は、不思議と、自分の痛みは神の存在の一部だとさえ思われる……。弱気なとき、「神よ、信じている……」と声に出して言いたくなる、そのときに。弱気になった後に瞬時に訪れる、本格的な覚醒。

僕は、危険が訪れた際には守り救ってくれるはずと、ポケットにレボルバーを持ち歩くように、子供の頃から身につけていた十字架について考える。運命的な避けがたい不発について。世界を魅了しては失望させる嘘の奇跡の輝きについて。そして、唯一の信じるに足る奇跡について——すなわち、何があろうとも、人々のなかに生き続ける、奇跡に対する牢固たる願望について。その大いなる意義のこと。ひとりひとりの、とくにロシア人の意識に刻まれた光の影のことを。

おお、このロシア人の、揺れさざめく、音楽的な、自慰にふける意識⁴。ろうそくの周りのプロヨのように、不可能なことの周りで永遠に回っている。夢の法則と一体となった人生の法則。おぞましいほどの形而上学的自由と、一歩進む度に立ちはだかる物理的限界。優越と弱さ、天才的不成功のつきることない源泉。おお、今日に至るまで光のなかの寄る辺ない影のようにさまよう、我々の奇妙な異種たち：英国かぶれ、トルストイ主義者、ロシアスノップ——つまり世界で最も醜悪なスノップ——、そしてさまざまなロシア人の少年たち、べたべたする紙片⁵、代々伝わるロシア人のタイプ、栄誉ある勲章を持ったインテリゲンツィヤの騎士、病的に発達した責任感を持ったろくでなし。そいつはいつも見張りながら、そいつは警察犬のように、至る所で不公平さを感知するのだ！そして、普通の人間は、そいつに追いつくことはできない。おお、我々の過去、我々の未来、我々の今の改悛の憂い。「だが、子供はなんと生き生きとしていたことか……」⁶。おお、このノスタルジーの深淵よ、風だけがそこを漂うのだ、あちらから恐ろしいインターナショナルを運びこみ、ここからあちらへ、嘆かわしい、神秘的な、まさにロシアを弔う「神よ、ツアーリを返したまえ」という歌を運びながら……。

僕は通りを行き、神について考え、女たちの顔を見つめる。ほら、この美しい女、僕の好みだ。彼女が下半身を洗う様子を想像する。足を開いて、少し膝を曲げて。ストッキングは膝からズレ落ち、眼はどこかまさにその深みにおいてピロードのように暗くなっており、表情は無垢で鳥のようだ。僕は、普通のフランス娘は決まって丁寧に尻を洗うが、足はめったに洗わないことについて考える。何のために？ だっていつもストッキングをはいたままで、パンプスを脱がないこともとても多いのだから。僕はフランス全体について考える。ここで滞った19世紀について。マドレーヌ寺院の小さな頂華、便器のなかで濡れたパン、はじめての聖体拝領に向かう未成年、栗、淋病の拡大、アヴェ・マリアの銀色の冷ややかさについて。1918年の和解の日について。パリは狂乱状態になった。女たちは誰でも出くわした男と寝た。兵士たちは、雄鶏のように叫び、街灯に昇った。誰もが踊り、誰もが酔っぱらっていた。新しい世紀の声が「勝利者に災いを」⁷と言ったのを誰も聞かなかった。

僕は戦争について考える。それが、映画のなかのように加速した、濃厚な人生のエキス

だということについて考える。世界をみまった不幸のなかに何があるかと、戦争それ自体は無関係だ。避けがたいものを早めたきっかけ、それ以上の何ものでもない。病人にはすべてが危険なように、最初のきっかけから古い秩序はゆっくりと崩れた。病人はキュウリを食べて死んだ。世界大戦はこのキュウリだったのだ。僕はこういう思索が陳腐なものだということについて考え、同時に、温もりか光のような、陳腐さの和ませる優しさを感じる。僕は、目の前で繰り上げられる時代について考える。女の二つの基本的異種について：つまり売春婦か、売春の外に踏みとどまったことを誇りに思うものたちか。世界の非人間的な魅力と、世界の生彩ある醜悪さについて。自然について、どれほど愚かしくそれについて文学の古典が描写しているかについて。人々が互いになすありとあらゆる忌まわしいことについて。哀れみについて。盲目の姉のために、サンタクロースに新しい目を頼む子供について。ゴゴリの死に方について：どのように彼の髭を剃り、恐ろしい審判で怯えさせ、ヒルで瀉血させ、浴槽にむりやり座らせられたかについて。僕は古い子守唄を思い出す：「猫は泥棒猫で、継母はいじわる」。僕は再び、僕は幸せになるべき人間だという考えに戻る。僕は、最も普通のもの、すなわち愛が欲しかった。

僕の、男の視点から見ると……。というか、視点というのは男のものしかないのだ。女の視点は存在しない。女は、それだけでは全く存在しない。それは、肉体であり、反射した光なのだ。しかしほら君は僕の光を選んで、去っていった。そして僕の光はすべて僕から去っていった。

僕たちは今のところ人生の表面を滑っている。辺境を。海の青い波間を⁸。調和と秩序の外観。汚れ、優しさ、悲しみ。今僕たちは飛び込むのだ。手を貸してくれ、見知らぬ友よ。

心臓は打つのをやめる。肺は呼吸を拒む。歓喜に似た苦しみ。非現実的なもの他はすべて非現実で、戯言以外、すべて意味がない。人間は盲目になり、同時に覚醒する。そんな均衡、そんな混乱。全体以上になった部分、その部分は、完全な無のすべてだ。世界の明瞭さと完全さは、静かな狂人の頭脳のなかのカオスの反映でしかないという謎。書物、芸術は、決してどこにも行かずどんな偉業も成し遂げない人のための偉業や旅の説明とすべて等しいという謎。巨大な精神的な生活は増大し、原子、外見的には何の取り柄もないが選ばれて唯一のかけがえのない人間のなかで燃え尽きるという謎。通りで最初に出会った人もまたこの唯一の選ばれたかけがえのない人間だという謎。あたかも、触れることのできない永遠の真実を、新たなやり方で立証するような、多くの矛盾した謎。秘められた

夢——教えてくれ、お前は何を密かに夢見ているのか。そして、僕はお前に話そう、お前が誰なのかを。——よろしい、僕は話そうと努力するけれども、お前は僕の言うことをちゃんと聞き取るだろうか？ すべてきれいに塞がれ、人生の表面には、どんな穴も開けられないだろう。原子、点、聾啞の天才とその足元の深い地下の層、人生の本質、朽ち果てた時代の石炭。孤独の世界記録。——さあ答えてくれ、教えてくれ、お前は密かに何を夢見ているのか、その孤独の一番奥底で？

僕の魂の歴史と世界の歴史。それらは、人生と夢のように絡み合っている。それらは接ぎ木され、互いのなかに生えていった。背景のように、悲劇的な下絵のように、それらの陰に現代の生活がある。それらは、抱き合い、一体となり、絡み合いながら、暗闇の恐ろしい速さとともに、虚無へと流されていき、その暗闇に続いて、だるそうに、それに追いつこうともせず、光が進む。

ファンファーレ。朝。見事な幕。幕なんてそんなものはない。けれども、丈夫であること、頑丈であることを願う求める思いはとても支配的なので、僕は、その一面に模様を織り込んだ厚手の絹を触ってみて感じる。それは、朝から晩まで、青い目の女職人たちが織っていた。一人は婚約者だった……。それはどこでも織っていなかった。通り過ぎて。通り過ぎて。⁹

死んだネズミが汚水バケツのなかに転がっている、最後に花嫁の尻を拭いた綿と並んで、灰皿からこぼれ落ちた吸い殻があるなかに。ネズミは新聞の切れ端に包まれていたが、バケツのなかでその新聞が解けて、浮かび上がっていた——おとといのニュースの断片をまだ読むことができる。三日目になっても、まだニュースであって、吸い殻は口のなかでけむり、ネズミは生きていて、処女膜は触れられていなかった。今、すべてこれらが混ざりながら、精彩を失いながら、消えゆきながら、滅びながら、虚無のなかに飛びさり、暗闇の恐ろしい速さで消え去っていく。その暗闇の後ろで、亀のように、追いつこうとさえせず、光が進んでいる。

安全剃刀の刃が、水分を含んだ吸い殻に引っかかり、汚水を通して、虹色の太陽の光を反射し、ネズミの顔までその光を導いている。ネズミは歯をむき出し、鋭い歯には膿がこびりついている。こんな年老いた経験ある注意深い敬信的なネズミが、身を守らずに、毒を食うとは、どうして起こりえたのだろうか？ ベルサイユ条約に調印した大臣が、年老いて、小娘のせいで金を使い込むなんて、どうして起こりえただろう？ 堂々たる風貌、石

のように固めた襟、騎士団長の十字架、「ドイツは支払うべきだ」——そしてこの金言を裏付けるべく、歴史的な黄金のペンで、歴史的な厚紙に残された確固たる飾り書き。そして突然、小娘、ストッキング、膝小僧、暖かく柔らかい息、暖かいバラ色の膾——そしてベルサイユ条約でも騎士団長の十字架でもないのだ——辱められた老人は牢獄のベッドで死んでいく。器量の悪い尊敬すべき未亡人はチヂミ織の薄い黒布にくるまり、田舎に永遠に去っていき、子供達は父親の名を恥じ、議会の同僚は悲しげに非難するように禿げた頭を振っている。けれどもこのすべての汚れと戯言の罪人は、すでに彼女より先に行っていた。ずっと前に、まだ寝室の扉が後ろで閉じられ、鍵がカチツとなり、過去が消え、広いベッドに小娘が残されたその時に、偽手形、恍惚、恥辱、死を先取りしていた。運命の先を行き、彼は今、凍りついた空間を飛んでおり、そして永遠の暗闇が、堅苦しい、時代遅れのフロックコートの燕尾を鳴らしている。彼の前には、吸い殻といくつもの歴史的条約、梳かした髪、咲き終わった世界的な思想の数々が、彼の後ろには、他の人の髪に、条約、吸い殻、思想、つばが飛んでいる。もしも、暗闇が彼を結局のところ、神の玉座の足元に連れて行ったとしたら、彼は神に「ドイツは支払うべきだ」とは言わないだろう。「おお、汝、終の恋よ……」¹⁰——呆然とつぶやくだろう。

死んだ少女とのセックス¹¹。体は完全に柔らかく、ただ水浴びの後のように冷たいだけだ。緊張感とともに、特別な快感とともに。彼女は眠るように横たわっている。私は彼女に悪いことはしなかった。逆に、この気違いじみた数分の間、人生はまだ彼女のまわりで続いていた、ただ彼女のためにではないだけで。窓の外で星は色褪せ、ジャスミンは咲き終えた。精液は逆戻りし、それをちり紙で拭いた。太いろうそくで火をつけ、私は葉巻を吸い出した。通り過ぎて。通り過ぎて。

君は僕の光を持ち去り、僕を暗闇のなかに残した。君一人に、余すところなく、世界のすべての魅力が集中していた。だが、僕は苦しいほど惜しかったのだ。君が古い、病み、醜くなり、憂いながら死んでいこうということ、僕が君と一緒にいられず、君はよくなるよと嘘つくこともなく、君を腕に抱えることができないだろうということが。僕は、この苦しみを経験しないことを喜ぶべきだったのだ。それでも、そこにこそ愛を為す重要な、もしかしたら唯一のものがあつたのだ。このことを考えただけで、恐怖はいつも僕の人生の星となっていた。そしてほら君はもうずっと前からいないが、その星は相変わらず、窓の外で輝いている。

僕は森にいる。何も理解せず、動揺し、命運尽きた魂の、恐ろしいおとぎ話のような雪景色。ガン腫瘍の入った瓶：腸、肝臓、のど、子宮、胸。緑がかかったアルコールのなかの色あせた流産児たち。1920年にペテルブルクでは、このアルコールは飲料用に売られていた——それはまさに「乳児汁」と呼ばれていた。嘔吐、湿っぽさ、腸を這い流れる臭う粘液。屍体。人間の屍体。チーズのにおいが足の汗のにおいに似ているという驚き。

北極でのクリスマス。輝きと雪。極めて純潔な冬の、人生を埋めていく白いヴェール。

晩。7月。人々は通りを行く。20世紀30年代の人々。空は暗くなり始め、まもなく星々が現れるだろう。今日の夕方、パリ、通り、筋雲のかかった空の影と光の戯れ、孤独な人間の心で戯れる恐怖と希望を描写することはできる。賢く、才気鮮やかに、生彩豊かに、もっともらしく描写することができるだろう。でも、奇跡を起こすことはもうできないのだ——芸術の嘘を真実と見せかけることはできない。最近まではまだうまくいっていた。だが、今は……。

昨日はうまくいっていたことが今日は不可能になった。新しいウエルテルが現れて、ヨーロッパ中で魅力的でうっとりした自殺者たちが、歓喜あふれる銃声を鳴らしだすなんてことを信じることはありえない。詩を綴ったノートを見せて、現代人がそのページを繰っては、自然と流れる涙を拭い、空を、ほらこんな夕方の空を、希望に胸を締め付けられながら眺める、そんなことはありえない。不可能だ。かつてはありえたと信じることができないくらい不可能だ。生皮であるかのように世界を締め付ける新しい揺るぎない掟は、芸術による慰めを知らない。さらに、この——このまだはっきりしない、すでに取り返しのつかない——新しい世界で生まれ、あるいはそれを生む、無情なほど公正な掟は、逆の力を持っているのだ：新しい天才的な慰めを生むことができないだけでなく、すでに過去の慰めによって癒されることもほとんどありえない。今でも、アンナ・カレーニナの運命に涙することができる人々がいる。その人たちはまだ自分たちとともに消えてゆく土壤に立っている。その土壤には劇場の基礎が埋め込まれ、その劇場でアンナはボックス席のピロードにもたれ、苦しみと美に輝きながら、自分の恥辱を耐え忍んでいたのだ。この輝きはほとんど我々にまで届いていない。つまり、少しは、霞んだ斜光のように届く——失われたものの最後の残光のような、喪失が取り戻せないという確信のようなものとして。まもなく、すべては永遠に輝きを失うだろう。残るのは知性と才能の戯れ、信じることを己に強いることなく、信仰以上の何も吹き込むことない慌ただしい読書。「三銃士」のよう

なものだ。トルストイ自身が誰よりも早く感じていたもの、避けがたい限界、境界、その向こうには——捏造された美によって与えられるどんな慰めも、捏造された運命のために流されるどんな涙もない。

僕は最も素朴で最も普通のものが欲しい。僕は泣きたい、慰められたい。僕は希望に胸を締め付けられながら、空を眺めたい。僕は君に長い別れの手紙を書きたい、絶望的で天上のもののように汚れていて、世界で最も優しい手紙を。僕は、君を天使、獣と呼び、君に幸せを願い、祝福し、そして、さらに言いたい、どこに君がいようとも、どこに行ってしまうとも——僕の血は、無数の粒子となって、許しを知らず、決して許すことなく、君の周りで渦巻いているだろう、と。僕は忘れて、休み、列車に乗って、ロシアに去り、ネヴァ川の上を揺れる水上レストランでビールを飲んで、暖かい晩に貝を食べたい。僕は、不快な茫然自失の気分を克服したい：人々には顔がなく、言葉には音がなく、何にも意味などない。僕はどんなでも良いからそれを壊してしまいたい。僕はただ深く息を吸い込み、空気を飲み込みたい。けれども空気なんて全くないときている。

明るい光とカフェの雑踏が一瞬自由の幻想を与えてくれる：身かわし、飛び出し、破滅は流れ去った。20フランを悔やまなければ、青ざめた美しい小娘と出かけることができる。小娘はゆっくりと並木道を通り過ぎ、男の視線にあって立ち止まるのだ。もしも、今、彼女に会釈するなら——幻想は凝縮し、強固になり、血を飲んだ幻のように、人生の高揚にバラ色になり、10分、12分、20分と引き延ばされていくだろう。

女。肉。神の音階から聞こえることになっていたあの唯一の音符を人間が引き出す道具。ランプは天井の下で燃えている。顔は枕に投げ出された。これが僕の花嫁だと考えて良い。僕が小娘のご機嫌を取り、こそこそと大急ぎで強姦すると考えて良い。何も考えないで良い、震えながら、耳を傾け、驚くべきものを耳にながら、時が訪れて、一つになる準備をした悲しみと幸せ、善と悪、生と死が、自分の軌道で食が起きる時のように交差するのを、不気味な緑がかかった生死の、幸不幸の光が、破滅した過去から、君の光を失った目から差しこむのを予感しながら。

僕の魂の歴史と世界の歴史。それらは結びつき、互いのなかに芽を出した。それらの陰

の現代性はまるで悲劇的な背景だ。全く実を結ぶことができなかつた種は、逆方向に流れ出て、僕はそれをハンカチで拭いた。それでもそこで、これが続いていたうちは、まだ人生が躍動していた。

僕の魂の歴史。僕はそれを体現したいが、逆のことしかできない。自分の文体を仕上げる作家、色彩を混ぜ合わせる芸術家、音のなかに浸っている音楽家、こういう人々皆をうらやましく思う。彼らは、地上でまだ絶滅しておらず、感覚的で無情な、遠視近視的な、みんなに良く知られた、もう何も必要としない種の人々で、人生の造形的再現こそが、人生にたいする勝利だと信じている。ただ才能さえあれば、頭や指や耳に特別な創造的精子さえあれば、虚構から何か、現実から何か、悲しみから何か、汚れから何かをとってきて、子供が砂をシャベルで均すように、すべてこれらを均して、アイシングでケーキを飾るように、様式や想像で飾りさえすれば、ことがなされ、すべてが救われ、人生の戯言、苦しみの無益さ、孤独、苦悩、ネバネバした吐き気を催す恐怖は——芸術の調和によって変容するのだ。

私はその代価を知っているが、やはり、彼らをうらやましく思う：彼らは幸いなのだ。眠っているものは幸いだ、死んでいるものは幸いだ。レンブラントの絵の前の専門家は幸いである、老婆の顔の影と光の戯れが、世界の祝宴であって、その前では老婆自身は無意味で、一粒のほこりで、ゼロであると、揺るぎなく信じる。審美眼のある人は幸いだ。バレエ狂は幸いだ。ストラヴィンスキイを聞くものたちもストラヴィンスキイ自身も幸いだ。去りゆく世界の影、その世界の最後の、甘い、嘘の、こんなにも長い間人類を眠りに誘い、目覚めを知らない眠りは幸いだ。人生から去りながら、もう去ってしまつて、彼らはともに、巨大な想像の豊かさを持ち去っていく。我々は何とともに残されるのだろうか？¹²

老婆はレンブラントよりも限りなく重要だという確信とともに。この老婆と我々はどうするのかという戸惑いとともに。彼女を救い、なぐさめたいという苦しいほどの願望とともに。誰も救われず何によつても慰めることはできないという明らかな意識とともに。ただ矛盾のカオスを通してしか、真実に行き着かないという感覚とともに。現実自体に支えられることはできないという：すなわち写真は嘘であらゆる書類は明らかに偽物という。すべての中間的な、古典的な、和やかなことは、考えられず、不可能だという。うなぎのように、節度の感覚が、それをつかまえようと力むものの手からすべりぬけていくという、そして、この獲得不可能性は、その保存された創造的特徴のうちの最後のものだという。やっとなぐさめられたとき、つかまえた者が手にしているのは陳腐なものだという。「その手には死んだ赤子が横たえられていた」¹³。周りのすべての人々の腕にはこの死んだ赤子たちがいるという。矛盾のカオスを通して永遠の真実に、せめてその淡い名残であつて

も、辿り着きたいと思っているものには、ただ唯一の道が残されているという：アクロバットが綱の上を行くように、人生の上を、みすぼらしく、だらしない、矛盾した人生の脚本を通り抜けるという道が。

写真は嘘をつく。人間の記録は偽物だ¹⁴。ベルリンの警察本部の建物で迷い、僕は偶然この廊下に突き当たった。壁には一面に写真がぶら下がっていた¹⁵。数十はあり、すべて同じものが写し出されていた。つまり、これらの自殺者や犯罪の犠牲者を警察が見つけたのだ。若いドイツ人はサスペンダーにぶら下がっており、具合がいいからと脱いだ靴はひっくり返った机のそばにある。老婆は胸に大きなシミがあり、その形は雄鶏を思わせるが、それは切られた喉からの血の塊なのだ。腹を引き裂かれた太った裸の売春婦。飢えか、不幸な恋か、あるいはその両方によって拳銃自殺した芸術家。砕かれた頭蓋の下に、凝った芸術家風のリボンがあり、隣のイーゼルの上に何か枝やクモがあり、聖なる芸術の未完の書き損じがある。大きく見開いた目、噛まれた舌、醜悪なポーズ、嫌悪を催すような傷、すべてが一緒に取り込まれたものは、一様で、アカデミックで、恐ろしくない。引き裂かれた腹から這い出ている一巻きの腸も、一つのしかめ面も、皮下溢血一つも、写真のレンズをすり抜けなかったが、重要なものはすり抜け、重要なものはないのだ。僕は眺めているが、僕を高揚させ、魂を震えさせるものは、何も見えない。僕は自分に力を込める——何もない。そして突然、君がここ地上で呼吸しているという考え、突然記憶にまるで、生きているかのように、君のすばらしい、無情な顔がうかぶ。

そして、僕はすぐにすべてが見え、聞こえる——すべての悲しみ、すべての苦しみ、すべての無駄な祈り、すべての死ぬ前の言葉。老婆の切り裂かれたのとで、ゼーゼー音がしたように、腸を絡ませながら、売春婦がサディストを撃退したように、才能ない飢えた芸術家——まさに僕自身のような——が死んでいったように。ランプが燃えていたように。朝焼けが輝いていたように。目覚まし時計が音を鳴らしたように。針が5に近づいたように。決めかねながら、決めて、彼が唇をなめたように。不器用で汗かきの手で彼がレボルバーを握ったように。氷のような銃口が燃え上がる唇に触れたように。彼が生き残っている彼らを憎み、うらやましがっていたように。

僕は海辺に出て、砂の上に横になり、目を閉じて、自分の顔に神の息を感じたかったのに。僕は、遠くから始めたかったのに——青いドレス¹⁶から、些細な諍いから、冬の霧の日から。「グルジアの丘に夜の闇が横たわった」¹⁷——だいたいこんな言葉を僕は人生と語りたかつ

たのに。

人生はもうこの言語を理解していない。魂は、別の言語をまだ学んでいない。こんなに病的に魂のなかで調和が消滅していく。もしかすると、それは完全に消滅し、乾いたかさぶたのように、はがれ落ちるとき、魂は再び、素朴にも軽やかになるだろう。けれども、移行はゆっくりで苦しい。魂にとっては恐ろしい。生命を与えてくれていたすべてが次々と干からびていくように魂には思われる。自分自身がひからびていくように思われる。魂は、黙ることができず、話すことができなくなった。そして、聲唾者が醜いしかめ面をするように、痙攣したように、不明瞭に話す。「グルジアの丘に夜の闇が横たわった」——創造主と自身を祝福しながら、魂は響きよく、堂々と発音したいのだ。そして、快感に似た嫌悪とともに、形而上学的堀から、淫らな罵言をつぶやく、「ドイル プ シチウルク ウベシチウル¹⁸」などと。

青いドレス、些細な諍い、冬の霧の日。千もの他のドレス、些細な諍い、日々。ひとりひとりの魂のなかで無意識に通り抜けていく千もの感覚。文学や、習慣、会話に入る市民権を受け取った少しの人々。そして残りの無数の、まだ文学的表現を見いだせず、まだ胎内の不可解な核から離れていない人々。けれども、それゆえに、すこしも平凡さにおいて劣らない人々：我慢強く自分のトルストイを待つ、形になっていない何千もの陳腐さ。芸術、一般的な意味での創作はまるで、次々と新しい陳腐さを求める狩りに他ならないという謎。それが目指す調和は、ある高次の陳腐さであるという謎。真の魂の道は、どこか、脇にあり、螺旋状に曲がりくねっている、螺旋状に——世界の醜悪さを通して。

僕は自分の魂について、素朴で説得力のある言葉で話したい。僕は、そんな言葉がないことを知っている。僕は、どのように君を愛していたか、どのように死んでいき、どのように死んだか、どのように僕の墓の上に十字架が立てられ、時とウジ虫がこの十字架をがらくたに変えたかを語りたい。僕は、ひとつかみこのがらくたを集め、空を最後に見て、軽やかな気持ちになって、手のひらを一吹きしたい。僕はさまざま、等しく叶わないものが欲しい——再び首筋の君の髪のおいを嗅ぎ、リズムのカオスから、壁を爆破するように世界の醜悪さを破壊すべき、唯一のリズムをもっと引き出したい。僕は、引っ掻き回したベッドの上に横たわっている人間について語りたい、その人間は、考え、考え、考え、——いかに助かりいかに正すかを、——そして何も考えつかなかったのだ。いかに彼がまどろみ、いかに目覚め、いかにすべてをすぐに思い出し、いかに声に出して、人ごとのように、「彼はカエサルではなかった。彼にはただその愛があった。けれどもその愛にすべて——権力、王位、不死があった。そしてほら壊れ、栄誉は剥奪され、肩章は引き裂かれた」と言ったかについて。僕は、簡単な説得力のある言葉でたくさんの魔法のかけがえの

ないものを説明したい——青いドレスについて、些細な諍いについて、冬の霧の日について。そしてまた、僕は世界を恐るべき敵、あわれみから未然に守りたい。僕は皆に聞こえるように叫びたい：人々よ、兄弟たちよ、固く手を取り、互いに無慈悲になると誓ってくれ。そうでなければ、それ——秩序の主たる敵——は、襲ってきて、お前たちを破壊するだろう。

僕は、最後に、虚無から君の顔を、君の体を、君の優しさを、君の無情さを呼び起こし、手のひらの上の一握りの遺灰のように、すっかり朽ちた君と僕の混ざったものを集め、軽やかに、それを一吹きしたい。けれども再び哀れみがすべてを混乱させ、再び僕の邪魔をする。僕はまた、異郷の町の霧を見る。乞食は、手回しオルガンの取っ手を回し、小猿が寒さにふるえながら、小さな皿をもって野次馬のところを回る。傘の下の不機嫌な人々は、いやいやコインを投げる。夜、朝まで抱き合って身を潜めて眠るのに足りるのか……。

僕は、騒々しい舞踏会のなかで、これを思い描いた——シャンパンや音楽、笑い、絹の衣擦れ、香水のにおいととも¹⁹。これは君の最も幸福な日々の日だった。君は若さ、魅力、無情さに輝いていた。君は楽しみ、人生を謳歌していた。僕は人々に囲まれて微笑んでいる君を見た。そして、目にしたのは、小猿、霧、傘、孤独、貧困だった。そして、堪え難い輝きで目を逸らすように、辛辣な哀れみのため目を背けたのだった。

哀れみがよぶ身震い。必ず復讐の感覚に移行する身震い。耳の聞こえない赤ん坊のために、意味のない人生のために、侮辱のために、穴のあいた靴底のために。平穩無事な世界に復讐する——きっかけはいつでも良い。それは「心臓がある人」²⁰が知っている。途方に暮れた哀れみから、別の形の無力さ——「今に見ている」——への、このほとんど機械的な移行。小獣たちさえ、動揺し、ささやき合い、長い時間「抵抗パンフレット」を作っていた——「猫たちを苦しめるお前ら」と。誰もが読むようにそれを新聞に載せられないかと頼んだ。

小獣たちは我々と切り離せなかった。僕らの皿から食べ、僕らのベッドで寝ていた。彼らのうちの重要なのは二人のラズマハイチク²¹だった。

ラズマハイチク・ゼリ^緑の^お目^目は親切で優しく、誰にも悪いことはしない人だった。セルイ^{灰色}の^お目^目は成長したら剛毅だった。彼は、時には噛み付くことありえた。彼らは地下鉄のベンチの下のナツメヤシの箱のなかで見つかった。箱にはメモが留められていた：「ラズマハイチクたち、あるいはラズマハイ、あるいはラズマハイツイ。オーストラリア出身。愛情、食料と、プローニュの森の散歩が求められる」²²

別の小獣たちもいる：「^ゴル^ブチ^ク」、^ジユ^フラ^ラ、「^フル^イシ^チク」、^キタイ^チク、「馬鹿な^ツワン^クワン」、こいつはすべての質問にいつも同じように答える——「ワンワンもいるよ」と。年老いた、見かけは荒っぽいが心は極めて優しい、短い魚のしっぽをつけた「^ムカ^カ」がいた。どこか脇には、会社に受け入れられない、敵意と恐怖を抱かせる、暗い「^クロ^クン^ブ」が生息していた。

小獣たちには、自分の生活、習慣、哲学、名誉、人生観があった。彼らには固有の獣の国があり、その境界は、海のように夢が困んでいる²³。その国は広大で、最後まで調査されていない。南にラクダがすんでいて、白い馬が金曜日ごとに彼らを洗い、毛を刈りにくるといふことは知られていた。最北にはいつももみの木が燃え、永遠にクリスマスだった。

小獣たちは、混ざった言語で理解しあっていた。そこには普通のものからオーストラリア調に作り替えられたオーストラリア固有の言葉があった。こうして、手紙のなかで、彼らは互いに「新たに尊敬する」と呼び合い、封筒には「高あご殿へ」と書かれていた。彼らは踊りと、アイスクリーム、散歩、絹のリボン、祝日、名の日が好きだった。彼らはまさにそんな風²⁴に人生を見ていたのだ：一年は何から成り立っているのか？——365日の祝日からだ。ではひと月は？——30日の名の日からだ。

彼らは輝かしい小獣たちであった。彼らはできる限り我々の生活を飾ろうとした。金がないと知ると、彼らはアイスクリームを求めなかった。彼らはとても悲しいときでさえ、踊り、名の日を祝った。何か悪いことを聞いた時は、向きを変え、聞かないようにした。「小獣たちよ、小獣たちよ——」彼らに毎晩恐ろしい「^クロ^クン^ブ」が穴からささやいていた、——「人生は去り、冬が近づいている。お前たちの上に雪が降り、お前たちは凍えるだろう。お前たちは死ぬだろう。小獣たちよ——お前たちは、こんなにも人生を愛しているのに」。けれども彼らは、互いにぴったりと抱き合い、耳をしっかりと塞ぎ、落ち着いて、尊厳を持って答えるのだ——「それは我々に噛み付かない」²⁴と。

人間は通りをぶらぶらし、さまざまなことを考え、他人の窓を見る。その想像力は、彼を無視して働いている。彼はその仕事に気づかない。彼はカフェに座り、ビールを飲み、新聞を読む。議会で議論。分割払いの自動車。彼はまどろみ、戯言を夢に見る。インクがテーブルクロスに流れ出た。魚は泳いでいき——インクは消えた。扉を閉めなければならないが、鍵は鍵穴に入らない。イギリスの国民的見解。サイクロン。まさに魚が鍵であって、そのために、その鍵は合わなかったのだということが分かった。眠っていたものは突

然目覚める。魚も、国民的見解もない。

カフェに座り、顔から顔へと当てもなく視線をさまよわせ、他人の窓を眺めるのが、やはり、アンナ・カレーニナやどこかのボヴァリー夫人以上の慰めだ。飲みかけのコーヒーを前に、抱き合ったまま座り、それから道に迷い、とうとう、振り返って、安いホテルに入る恋人たちを目で追うのも、最も完璧な愛についての詩以上でないとしたら、同じだ。「小さな足が歩き、金の肘がねじれる」²⁵。ほらそれだ、小さな足が、モンマルトルの並木道のアスファルトをとんとん鳴らして、ほら、金の肘がちらりと見えて、ホテルのガラスの扉の向こうに消えてしまった。これは今日という日、これは僕のかげがえのない人生が震えながら飛び去っていく瞬間——もちろん、比べることができるだろうか——これは一緒に取り上げられた詩すべてよりも上だ。足音は静まり、肘はちらりと見えて、扉の向こうに消えた。しばらく立っていて、待とう。ほら、一階の窓に明かりがついた。ほら、カーテンが引かれた。

下男がお茶代を受け取り、彼らだけにした。天井の下のランプ、まばらな壁紙、白いほうろくのピデ。もしかしたら、これははじめてのことだ。もしかしたら、これは世界で最も幸福な愛だ。もしかしたら、ナポレオンが戦い、タイタニックが沈んだのは、ただ、今晚この二人がベッドで並んで横になるためだ。毛布の上、石のようにどっしりと広げられたシーツの上で、慌ただしい不器用な不死の抱擁。ずり落ちるストッキングに包まれた膝が乱れ、枕の上の髪が乱れ、顔は美しく歪んでいる。おお、もっと、もっと長く。もっと、もっと早く。

——待て。君は、これが何か、知っているかい？ これは僕らのかけがえのない人生だ。いつか、100年後、僕らのことが詩に書かれるだろう。でもそこにはただの響きの良いリズムと嘘しかないのさ。真実はここにある。真実はこの日、この時、この滑り抜けていく瞬間だ。誰も君の膝を広げなかったが、ほら僕が明るい光のもと、白いアイロンをかけた広がりの中、それらを乱暴に開く。君は恥ずかしく、痛みを感じる。君の痛みと恥ずかしさの一粒一粒が、そのすべての重さをかけて、僕のエクスタシーの極みに入ってくる。

この二人は誰か？ おお、どうでもいいではないか。今彼らはいないのだ。これが続く間、外に向かって震える輝きだけがある。ただ、緊張、回転、燃焼、人生の秘めた意味の至福の再生だけ。世界の素晴らしさの氷の頂上、流れる灯に照らされている。精子の糸、卵子、破られた膜、ウワミズザクラ、乱れた膝、我を忘れて、星、よだれ、シーツ、血管は震え、粉々に、粉々に、い……、い……、い……。人間に届く唯一の音は、そのおぞましい響きだ。おお、もっと長く、長く、もっと早く、早く。最後の痙攣。収縮し振動する子宮に流れ落ちる熱い精子。願望が、深く永遠へと投げ出された螺旋にそって、円を描き、空虚のなか

に戻ってきた。「これは、あまりにもすばらしく、死とともに終わるはずがない」、——若いトルストイは、結ばれた夜の後に、こう書き留めている。

カフェに人が座っている。普通の人間、ゼロ。こんな人間のことが、カタストロフィーの後に書かれるのだ：10人殺され、26人怪我。企業共同体のディレクターでも、発明家でも、リンドバーグでも、チャップリンでも、モンテルランでもない。彼は新聞を読んで、今やイギリスの世論がどのようなムードなのか知っている。彼はコーヒーを最後まで飲み、清算するためにギャルソンを呼ぶ。彼は、漠然と、何をこれからすべきか考えている——映画に行くか、宝くじ用に金をとっておくか。彼は落ち着いていて、穏やかな気分で、彼は眠り、戯言を夢に見る。そして突然、急に、自分の前に、自分の孤独の黒い穴を目にする。心臓は打つのを止め、肺は呼吸を拒む。感動に似た苦しみ。

原子は動かない。眠っている。すべては滑らかに塞がれ、人生の表面は、一つの泡粒も通り抜けない。けれども、もしも原子をほじくり回したなら。その眠りの核を少し揺り動かしたら。引っ掛けて、少し揺らし、引き離したら。百万ボルトで魂を通し、それから氷のなかに沈めたら。誰かを自分以上に愛し、それから孤独の穴を、黒い凍りついた穴を見つけたら。

人間、ちっぽけな人間、ゼロが呆然と前を見ている。彼は黒い空虚を見て、そこに一瞬の稲妻のように、理解を超えた人生の本質を見る。流れる炎に一瞬照らされ、闇に今まさに飲み込まれる千もの名もなき、答えのない問い。

意識が、震え、疲弊しながら、答えを探している。何についても答えはない。人生は問いかけ、答えてくれない。愛は問いかけ……。神は人間に——人間によって——、問いかけたが、答えは与えなかった。そして、人間は、問いかける運命にあるばかりで、何にも答えることはできない。不成功の永遠のシノニムは答えだ。世界の歴史を通して、どれだけすばらしい問いが提示され、何が答えとして与えられただろう……。

20億の地球の住人たち。それぞれが己の苦しくてかけがえのない等しい、何にも必要のないうんざりする複雑さによって複雑だ。それぞれが、原子が核のなかに閉じ込められているように、孤独の鎧のなかに閉じ込められている。地球に住む20億の人々は20億の法的例外だ。けれども同時に法でもある。みな不快だ。みな不幸だ。誰も、何も変えることも、何も理解することもできない。僕の兄弟ゲーテよ、僕の兄弟門番^{コンシユルジュ}よ、二人とも、自分たちが何をなしているか、人生があなた方の人生に何をなしているか、ご存じないのだ。

点、原子、その魂を何百万ボルトが飛ぶように貫いていく。今、それが魂分解する。今、不動の不能が恐ろしい爆発力によって終わる。今、今。すでに、大地が揺れ始めた。すでに、エッフェル塔の杭のなかで、何かがきしんだ。砂嵐が、かすんだ筋をなして、砂漠を舞い上がった。海は船を沈める。列車は転覆していく。すべては破裂し、崩れ落ち、溶解し、無にかえる——パリ、通り、時、君の姿、僕らの愛。

人間、ちっぽけな人間、ゼロは視線を留めて座っている。下男が近づき、おつりを渡す。人間は深く息を吸い、立ち上がる。彼は、巻きタバコを吸い、通りを行く。彼の心臓はまだ破裂していない——ほら、それは今までどおり胸のなかで打っている。世界の醜悪さは崩壊せず——ほらそれは胸がドキドキとしていたように、以前と変わらず世界を支えている。

青いドレス、些細な諍い、冬の霧の日。話したいという願望、歌いたいという欲求——自分の愛について、自分の魂について。へとへとになり、シンプルな、説得力のある言葉に飲み込まれたい。そんな言葉はないのに……。

僕らの愛はどうやって始まったか？ 陳腐に、陳腐にだ、すべてのすばらしいものの始まりが陳腐であったように。おそらく、調和も陳腐なのだ。おそらく、そのことに不満を漏らすのは意味がない。おそらく、皆にとって、過去も今も、人生の上を、人生の苦しみの感覚をつたって、通り抜ける、ただ一つだけの道があるのみだ——綱渡りのアクロバットのように。最後の肉体的接近において、最終的な獲得不可能性において、魂を分裂させる優しさにおいて、これらすべての永遠の、永遠の喪失において生まれる、捉え得ない感覚をつたって。窓の外は夜明け。願望は円を描いて、地中に去った。赤ん坊は孕まれた。なぜ、赤ん坊が必要なのか？ 不死はない。不死などあり得ない。こんなに僕は孤独なら、なぜ僕に不死が必要なのか？

窓の外は夜明け。僕の腕のなか、皺になったシャツの上、この世の汚れない魅力のすべてと、それに何が起きたのかという理解できない問いがある。それは天上のもので、非人間的だ。一体人間はこの非人間的な輝きをどうしたらいいのだろうか？ 人間——それは、皺、目の下の袋、心と血のなかの石灰、人間——それは何よりも、悪をなす己の神的権利についての疑いだ。ある詩人が言ったように「人間は悲しみから始まる」²⁶。誰が反論するだろう。人間は悲しみから始まるのだ。人生は明日始まる。ヴォルガはカスピ海に流れ込む²⁷。ドイル ブシチウイ ルウベシチウル。

この日、この時、この滑り抜けていく瞬間。何千ものこんな日々、瞬間、同じで、繰り返されることのない。この筋雲のかかったパリの夕暮れ、僕の目の前でかすんでゆく。何千ものこのような夕暮れ、現代の上、未来の上、滅びた何世紀もの上に。同じ輝く空虚を、同じ希望を持って眺める何千もの目。世界の素晴らしさの永遠のため息：僕は枯れ、消え、僕はもういない。「グルジアの丘に夜の闇が横たわった」。そして、ほら、それは、モンマルトルの丘にも横たわった。屋根の上、交差点の上、カフェの看板の上、慌ただしい音を立てて、まるでアラグヴァ川のように、水がざわめく半円の便器の上。

便所の反対側には、ベンチがある。ベンチにはほろを着た老人がいる。彼は、歩道で拾った吸い殻を吸っている。彼は、何にも興味がなく、まどろんでいる様子だ。けれどもこれはそう装っているのだ。用心して、あの便所に入るものたちを目で追いかけている。その便器には新聞の切れ端が入っていて、その上には小便を吸って膨らんだパンのかけらがのっかっているわけだ。ほら、太い首の労働者が歩きながらズボンの前をはずしている。広く足を開き、パンの上に小便をする。シラミだらけのじじいの魂に至福の痙攣。今、振り返って、まだ昨日のニュースの断片が読み取れるぬれた新聞を急いでまくり上げ、このパンを家に持ち去るのだ。今、今、びちゃびちゃ音をさせ、赤ワインを飲みながら、太い首の労働者の最後の細部まで想像しながら、黄色いズボンの少年を、自分の渋い暖かい小便をこの大きなパン半キロに含ませたすべての、すべての人々を想像しながら。今、今。歓喜に似た苦しみ、至福の痙攣。去って行きながら、何か歩きながらモゴモゴ言っている。たぶん、音も声もない彼の魂が、自分なりにむにゃむにゃと言おうとしているのだ——「グルジアの丘に……」と。

夕暮れ、何千もの夕暮れ。ロシアの上に、アメリカの上に、未来の上に、滅びた何世紀もの上に。傷を負ったプーシキンが雪に肘をつき、彼の顔に赤い夕焼けが射す。夕焼けは霊安室に、海の上、アルプスの上の手術室に、板張りのラーゲリの便所にも：黄色や茶色のすべてのニュアンス、壁の点々、隙間から入ってくるさわやかな空気にかき消される複雑な悪臭。バラ色の若者の新兵が片手で扉を支え、もう一方の手で急いで自慰をする。呼吸困難になり、声にならない声で叫び、終える。コップ半分、指をねっとりした暖かさで濡らし、蠅を追いかけて、茶色いぬかるみのなかに倒れ込む。若者の顔は灰色になる。彼は、ぐったりとしてズボンを引っ張り上げる。結局、村に残してきた花嫁を思い浮かべることには失敗した。もちろん、彼は戦争で殺されるだろう、もしかしたら、もう今年のうち。

タンブル塔の上の夕焼け。ルピャンカの上の夕焼け²⁸。宣戦布告の日、和解の日の夕焼け：みな踊り、みな酔っぱらい、誰にも「勝利者に災いを」という声が聞こえなかった。いつ

か僕と君が住んでいた部屋の夕焼け：青いドレスはこの椅子の上においてあった。

ベテルブルクの早い夕焼けはとうに消えた。アカーキイ・アカーキエヴィチは勤めからオペラ橋のほうへ通り抜けていく²⁹。外套はもう盗まれたか？あるいは彼は新しい外套のことを夢見ているだけなのか？迷ったロシア人は、知らない通りで、知らない家の窓の前に立ち、その自慰する意識は一つ一つのため息、一つ一つの痙攣、一つ一つのシーツの折れ目、一つ一つの細い血管を想像する。女はもう彼を裏切り、もう筋雲のかかった夕暮れの空に跡もなく溶けていった。あるいは、彼はただ彼女と会うことを予感しているのか？ どうでもいいではないか。

夕焼けはもうとうに消えた。勤めはもうとうに終わった。オペラ橋の屋根裏で暖かいビールがごぼごほと鳴り、タバコの煙が渦巻いている。「彼は九等文官だ。彼女は将官の娘だ」——取り入るように、優しく、滑らかにギターがため息をつく³⁰。屋根裏のお役所の神話が花開く、この神話は、自己防衛で、プーシキンの明白さの凍った神話と対照をなす。神話は——硫酸、秘密の夢だ、——この明白さを歪め、蝕み、墮落させる。

アカーキイ・アカーキエヴィチは俸給を受け取り、書類を書き写し、外套代のため、食事をし、お茶を飲む。けれども、これはすべて表層、夢、物事の本質からは果てしなく遠い戯言。点、魂は、不動で、最も強力な顕微鏡でも見えないくらい小さい。けれども、内には、貫通し得ない孤独の殻の下に、果てしないばかげた複雑さ、恐ろしい爆発力、硫酸のような鼻を突く秘めた夢がある。原子は動かない。それはぐっすりと眠っている。それは、勤めやオペラ橋を夢見る。けれども、もしも軽く揺すり、噛み合わせ、分裂させたら……。

将校の娘、プシケー、天使が全身モスリンを身につけ、閣下の書齋に走り込み、お役所ネズミ、人間、ゼロ、他人の背のフロックコートを来た卑屈な影が、彼女に深いお辞儀をする。それだけでおしまい。プシケーはぼそぼそと言う：ボンジュール、パパ。紅潮した将校の頬に接吻し、笑顔を輝かせ、モスリンをさらさら鳴らし通り過ぎ、さっと立ち去る。そして、これは何が見えているのか、誰も知らない、夢なのか、空しいものなのか、誰も言い当てることができない……。³¹

人生の退屈とビールでぼんやりとした頭とともに、こびるようなギターの響きのもとに、アカーキイ・アカーキエヴィチは空しさと表面を残し、モノの本質に沈んでいく。秘めた夢はプシケーのイメージを包み、少しずつ彼の貪欲な思考は望み通りの彼女の肉体に変わ

る。日中に克服し得ない障害は、——自ら崩れ落ちる。彼は空っぽの眠れる町を、音を立てずに滑り抜け、誰にも気づかれずに、音のない影のように、閣下の暗い住居のなかに入り、彫像と鏡の間に、フローリングと絨毯の上を、まさに天使の寝台の方に通り抜けていく。扉を開き、敷居で立ち止まり、「天上にもないような天国」を見る。肘掛け椅子に散らばった彼女の下着を見、枕の上の彼女の寝ぼけた小さな顔を見、彼女が、雪のように白いストッキングを履くその足を毎朝置く小さな腰掛けを見る。彼は九等文官で、彼女は将校の娘。そして、ほら……。何も、何も、沈黙。³²

秘めた夢によってほんやりとしたギターのリズムのもと、粘り強く、のほせ上がり、長い時間、長い年月、一つの点に向けられた想像力によって、彼はプシケーを実体化し、彼女自身が彼の屋根裏を訪れ、彼のベッドに横になるよう強いる。そして、彼女はやってきて、横たわり、モスリンの裾を持ち上げ、裸のつややかな膝を左右に広げる。彼は九等文官、彼女は将校の娘だった。彼は会ったとき、自分の修理したブーツから目を上げることができず、卑屈に彼女にお辞儀した。そしてほら、広く膝を開き、天使の純潔の微笑みを見せ、彼女は、彼が、こころゆくまで、こなごなになるほど、彼女をもてあそぶのを待っている。

「美しくあれ、ピョートルの^{まち}都市よ、そして揺るがずにあれ」³³、——熱っぽく、胸騒ぎに反して、プーシキンが叫びをあげ、ドンジュアンリスト³⁴には誰もが名を連ねる。「何もない、何もない、沈黙」、——ゴーゴリが、空虚のなかに目を揺らし、寒いシーツの下で自慰をしながら、ぼそぼそ言う。

「美しくあれ、そして揺るがずにあれ」。人生の表層で、たとえ夕暮れであっても明るい光線のなか、あたかもそれもあり。ほら、パリは今まで揺るがずにある。この暖かい夏の夕暮れにすばらしい。栗の木、自動車、夏のワンピースを着た女裁縫士。世界で最もみっともない彫像の周りではっと燃え上がる街灯の見事なこと。木箱のなかに散らばった花。暗くなっていく空に浮かぶサクレ・クール寺院。胸騒ぎがするの、魂は人生に惹きつけられる。ほら、魂は軽い筋雲のなかに。——「私は枯れていく、私は消えていく、もう私はいない」。そして、まったくアラグヴァ川のように堂々と、悲しく、音もなく、便器のなかで水がざわめく。

けれども、夕焼けは早く暗くなり、そして、夜の闇はますます早く人間を捕らえる。それは、表層に戻った時、もうそれが分からないような、深みに彼を連れて行く。でも、彼は戻ることもないのだ。魂がどんどん深く、——螺旋状に螺旋状に——ねじ込まれていく

黒い幸せのなかで、この長いこと揺らいでいる揺るぎなさと、長いこと歪められている美しさは、魂にとって何のために？ ピョートルは、墓から臓物をぬきとり、吸い殻を歯に、赤軍兵たちの笑い声のもとペトロパヴロフスキイ聖堂の壁に寄りかかるが、大丈夫、ペトロパヴロフスキイ聖堂は崩れ落ちないだろう。ダンテスはプーシキンを殺し、イワン・セルゲーヴィチ・トゥルゲーネフは仰々しく、ダンテスの手を握るが、大丈夫、彼の手が麻痺することはないだろう。そして、こういうことすべてが、ここで、僕らの魂の一番底で、僕らに何の関係があるだろう。僕らの等しく、さまざまな、音も声もない魂は、——共通の目的をかぎつけて、そして——螺旋状に、螺旋状に——見かけと表層を通して、そこに向けてねじ込まれていく。僕らの不快な、不幸な、孤独の魂は、一つになって、螺旋状に、螺旋状に、世界の醜悪さを通して、できるかぎり、神に向かって通り抜けていく。

青白い、美しい小娘が、男の視線に出会い、歩みを遅くする。もしもストッキングをはいて、やるのが好きではないことを彼女に説明するなら、彼女は、追加分を期待して、喜んで足を洗うだろう。熱いお湯で少し膨らんだ、短く切られた爪をした、ナイーブな、つまり、誰かに見られ、接吻され、熱い額を押し付けられることになれていない、^{まち}街娼の小娘のそんな足が、プシケーの足に化けるだろう。

心臓は打つのをやめる。肺は呼吸を拒んでいる。真っ白なストッキングはプシケーの足から脱がされる。ゆっくりと、ゆっくりと、膝が、くるぶしが、柔らかな子供のかかどが、あらわになる間に——年月が飛ぶように過ぎていく。小さな指が見えるまでに、永遠が過ぎた……。そしてほら——すべてが叶えられた。もう待つものは何もない、夢見ることは何もない、生きる目的は何もない。もう何もない。ただこわばった唇に押し付けられた天使の裸の足と、唯一の証人——すなわち神だけ。彼は九等文官、彼女は将校の娘だった。そして、ほら、ほら……。

シーツは氷のように冷たい。夜は窓の外にぼんやりと浮かび上がる。くっきりとした鳥の横顔が枕にのけぞっている。おお、もっと、もっと長く、もっと、もっと早く。すべては達成されたが、魂はまだ最後まで満たされておらず、満たされるのに間に合わないとおびえている。まだ時間があるうちに、夜が続いているうちに、雄鶏が歌わぬうちに、原子が、振動して何十億もの部分に分解せぬうちに——まだ何を成し遂げることができるだろう？ ものの本質をかき回し、噛み合わせ、分裂させる以上に、どのようにしたら、自分のエクスタシーを、その本質を、もっと深く見抜くことができるのだろう？ 待ってくれ、プシケー

よ、立ち止まってくれ、愛しい人よ。君はこれがすべてだと思うかい？ 高次の点、終わり、限界？ いや、だまされない。

静寂と夜。子供の裸の小さな指がこぼった唇に押し付けられている。それらは純潔さと、優しさと、バラの水のおいがする。いや、違う、違う——だまされない。螺旋状に、螺旋状に、見かけと表層を通して、貪欲な情熱がまとわりつく。うっとり天使の肉体のなかに、己の血に流れる恥すべき夢の本質を見破ろうとしながら。——教えてくれ、純潔とバラの水を通して、君の白い足は何のおいがするのだろう、プシケーよ？ 物事の一番の本質において、それは何のおいがするのかわかるのか、答えてくれ？ 天使よ、僕と同じ、僕と同じにおいだ、愛しい人よ。だまされない、違うのだ！

そして、プシケーは知っている：だませないということ。彼女の足は、執拗で貪欲な手のひらのなかで、震えている、そして、震えながら、自分が持っている最後のものを与える、——最も奥に秘めた、最も大切なもの、それ故に最も恥すべきものを：極めて軽い、はかない、それでいてどんな魅力によっても、どんな純潔さによっても、どんな社会的な不平等によっても壊されることのないにおい。僕のおいと同じ、愛しい人よ、僕の野卑な足のおいと同じだ、うぶな小娘よ、天使よ、貴族よ。つまり、僕らの間にはどんな違いもなく、君が僕を厭うべきものは何もない、僕は君の舞踏会向きの足に接吻をし、僕はそのために魂を捧げたのだから、君も、同じように、かがんで、僕の悪臭のするソックスに接吻したまえ。「彼は九等文官、彼女は将校の娘……」。今や僕は君を一体どうしたらいいのだろう、プシケーよ？ 君を殺す？ どうでも良い——だって、今や死んだ君が僕のところに来るのだから。

見知らぬ町を迷子の人間が行く。海の満ち潮のような空虚が、少しずつ彼を飲み込んでいく。彼はそれに逆らわない。去っていきながら、独り言をつぶやく——プーシキンのロシアよ、お前は どうして我々を欺いたのだ？ プーシキンのロシアよ、何のためにお前は我々を裏切ったのだ？

静寂と夜。完全な静寂、絶対的夜。すべてが永遠に終わるという考えが、静かな勝利感で人間を一杯にする。彼は予感する、彼は多分、これがこうではないということを知っている。けれども、この瞬間が続く間、彼はその考えに逆らいたくない。もう生に属さずについて、虚無に囚われて——彼は、音楽か潮騒か、おぼろげな、歌うような嘘のように、己を寝かしつけることを許す。

すでに、人生に属さず、まだ虚無に捕らえられておらず……。まさにその境目において。彼は、クモの巣で揺れている。世界のすべての重みが彼にかかるが、彼は知っている——この瞬間が続く限り、クモの糸は切れずに、すべてもちこたえるということ。彼は一点を、限りなく小さい一点を見るが、この瞬間が続く限り、人生のすべての本質がそこに集中している。点、原子、そのなかを飛ぶように通り抜け、粉々に、粉々に孤独の殻を溶かす何百万ボルト。

……螺旋は深く永遠のなかに投げ出されていた。その螺旋をつたって、すべてが飛ぶように過ぎた：吸い殻、夕暮れ、不死の詩、切られた爪、その爪の下から出た汚れ。世界の思想、そのために流された血、殺しと性交の血、痔の血、膿んだ腫瘍の血。ウワミズザクラ、星、純潔、排水管、癌腫瘍、快樂の戒律、アイロニー、アルプスの雪。バルサイユ条約に調印した大臣は、「ドイツは支払うべき」と口ずさみながら、過ぎ去っていった、——そのとんがった歯には希薄腐敗膿が固まり、胃にはネズミとり用の毒が照射された。外套を追いかけながら、アカーキイ・アカーキエヴィチは、鳥のような横顔とともに、自慰常習者の精子にまみれた麻布のズボン下を履き、消え去っていった。希望すべて、痙攣すべて、哀れみすべて、無情すべて、肉体の水分すべて、臭う肉すべて、音も声もないエクスタシーすべて……。そして、何千もの他のもの。ソロフキでシラミに食われた人間が夢に見る、白いシャツをきてするテニスと、クリミアの水浴び³⁵。さまざまなシラミ：衣服の、頭の、そして特別な皮下の、練り香水だけで除去されるもの。練り香水、やせ薬、コンドーム、ネヴァ川の流水、リド島の夕暮れと夕暮れや流水についてのすべての描写——文学的古典の無意味な本のなかに書かれている。絶え間ない雑然とした流れのなかに、青いドレス、些細な諍い、冬の霧の日が一瞬浮かんだ。螺旋は深く永遠のなかに投げ出された。粉々に碎かれ、溶けた世界の醜悪さは、縮小し、振動しながら、その螺旋にそって消えていった。その、まさに境目で、目的地で、すべてはまた一つになった。回転、震え、輝きを通して、少しずつ、はっきり見えてきて、線が現れてきた。人生の意味？ 神？ いや、すべて同じ：大切な、無情な、永遠に失われた君の顔。

もしも、小獣たちが、僕が彼らのオーストラリア語をどれほど重要な公式書簡に用いているのかを知ることができたら、彼らはもちろんとても誇らしいだろうに。僕はとっくに死んでしまっても、彼らは相変わらず、楽しく、踊り、小さな手を叩いていただろうに。

「新たに尊敬するコミッサール殿。自らの意志で、特別はっきりしているわけではない頭で、でも強固な、とても強固な記憶のなかで、私は自分の名の日を祝うのをやめます。自身が、世界の醜悪さの一部なのです、——私はその醜悪さを責める意味を見いだすことができません。私は、新婚のトルストイの言葉を言い換えながら、さらに付け加えたいの

です：『これは死で終わることができないほど無意味だった』と。驚くべき、強烈な明白さで、私はこのことを今理解しています。けれども、——再びオーストラリア語に移行しながら言いましょう——これは、高あご殿には嘸み付きません」。³⁶

1937

-
- 1 本翻訳は、*Иванов, Георгий «Распад атома» // Георгий Иванов. Собрание сочинений в трех томах. Т.2. Проза. М.: «Согласие», 1994. С.5-34* を底本としている。この散文作品はロシア人詩人ゲオルギイ・イワノフ (1894-1958) によって、1937年に執筆され、翌年バリで単行本として刊行され、多くの作家や詩人、批評家などの間で、スキャンダルとも言える議論を呼んだ。散文ではあるが、詩的要素が強い作品として、散文詩、詩的散文といったジャンルに位置付けられることが多い。イワノフは、ロシア革命後に亡命した第一次亡命ロシア人で、亡命前から創作活動を行っていた「年長の世代」に属する詩人であるが、詩人として高い評価を得るのは亡命後である。同世代の亡命詩人らが創作活動を離れるなか、積極的に詩作に取り組み、一層の成熟を見せたことで、「亡命第一の詩人」とも言われる。イワノフの亡命後の創作期間は大きく二分することができるが、本作品はその前半の最後の作品と言える。この作品を執筆したのち、イワノフは、創作人生において唯一の詩作休止期間に入り、数年後、再開した際の詩は前半とは多くの点で異なっている。そのような点から、この作品は、亡命後の創作活動の展開を考える上で、極めて重要な作品である。また、一人称の語り手によって語られるこの作品は、同時代のヨーロッパの実存主義文学を彷彿させるとともに、亡命ロシア人の喪失感、絶望感が強く現れた作品であり、1930年代の世界的な緊張感、亡命ロシア人の状況といったコンテクストにおいても重要な作品である。本文には、イワノフの特徴である引用が多く用いられており、それもまた、ロシア文学やロシアの詩的言語の喪失というテーマと深く関わっていると考えられるだろう。引用の出典については、上記作品集の注 (Комментарии, С. 443-447) のほか、*Марков, Владимир Русские цитатные поэты // О свободе в поэзии. СПб.: Чернышева, 1994. С. 214-232, Notes, The Atom Explodes, Russian Émigré Short Stories from Bunin to Yanovsky, edited by Bryan Karetnyk, Penguin Classics, 2018, pp. 410-412, および Notes, Disintegration of the Atom, Ivanov, Georgy, Disintegration of the Atom, Petersburg Winters, translated from Russian, edited, annotated, and with an introduction by Jerome Katsell and Stanislav Shvabrin, Boston, Academic Studies Press, 2016, pp.225-247* が詳しい。これらに加え、翻訳者により明らかになった出典も含め、注を付した。
 - 2 ゲーテの『ファウスト』からの引用であるが、イワノフは、同じ箇所を引用したメレシコフスキのエッセイ「ゲーテ」(1913)も知っていた可能性が高いと指摘される。(Notes, Disintegration of the Atom, p.225.)
 - 3 イワノフが「ブロークとグミリョフ」のなかで引用しているブロークの「何も息をするものがなくなり、詩人は死ぬ」(*Иванов Г. Блок и Гумилев // Возрождение. Тетрадь 6, 1949. С. 121*) という言葉と呼応する。
 - 4 チャアダーエフの『哲学書簡』の影響が指摘される。(Комментарии, С.444.)
 - 5 ドストエフスキ『カラマーゾフの兄弟』第2部第3章におけるイワン・カラマーゾフの言葉より引用。(Notes, The Atom Explodes, p. 411, Notes, Disintegration of the Atom, p. 226.)
 - 6 ニコライ・ネクラソフの詩「小さな棺」(«Гробок») (1850) より引用。(Notes, Disintegration of the Atom, p. 226.)

- 7 ラテン語の“Vae victis”「敗れたる者に災いを」（BC390年頃にローマに勝利したガリア軍将軍が言った言葉）を書き換えている。（Комментарии, С.445, Notes, The Atom Explodes, p. 411, Notes, Disintegration of the Atom, p. 243.）
- 8 ヨーゼフ・クリスティアン・フライヘル・フォン・ツェードリッツ（Joseph Christian Freiherr von Zedlitz）のバラード「幽霊船」（“Das Geisterschiff”）のレールモントフによる改作「飛行船（ツェードリッツより）」（«Воздушный корабль (Из Цедлица)»）（1840）より引用。（Комментарии, С.445, Марков, С. 226, Notes, The Atom Explodes, p. 411, Notes, Disintegration of the Atom, p. 230-233.）
- 9 ニコライ・グミリョフの詩「第六感」（«Шестое чувство»）（1921）より引用。
- 10 チュッチェフの詩「最後の恋」（«Последняя любовь»）（1852-54頃）より引用。（Комментарии, С.445, Марков, С. 226, Notes, The Atom Explodes, p. 411, Notes, Disintegration of the Atom, p. 233-234.）
- 11 死んだ少女のイメージは、アレクサンドル・イワノヴィチ・チニャコフからの引用の一つ。（Notes, Disintegration of the Atom, p. 234.）
- 12 「幸いだ」と繰り返される箇所は、キリストによる山上の垂訓（マタイ5章3-11節、ルカ6章17-49節）と呼応する。（Комментарии, С.445, Notes, Disintegration of the Atom, p. 234-235.）
- 13 ワシリイ・ジュコフスキー訳のゲーテ『魔王』より引用。（Комментарии, С.445, Марков, С. 226, Notes, The Atom Explodes, p. 411, Notes, Disintegration of the Atom, p. 235.）
- 14 イワーノフの詩は、簡明なイメージによって喪失や絶望を表現しようとした「パリ調」を体現していると言われているが、その「パリ調」は現実を模倣する「人間の記録」を容認している。この点からも、「人間の記録」に偽りを見出すイワーノフの詩は、「パリ調」という枠に収まるものではないことが明らかであり、特に詩作再開後の詩は、より複雑なイメージを内包し、現実の表現を離れ、詩による現実の創造へと向かっている。
- 15 イワーノフは、フランスに移住する前、1922-23年に、ベルリンに住んでいた。ドイツ在住の外国人は、犯罪博物館のある警察本部で登録し、定期的にその登録を更新する必要があった。（Notes, Disintegration of the Atom, p. 236.）
- 16 イワーノフの『第三のローマ』にも青いドレスが見られ、同一視する見解もあるが（Комментарии, С.445）、『原子の分解』の青はсинийなのに対し、『第三のローマ』ではголубойが用いられている。同じсинийのイメージが見られる、ブロークの「英雄的行為について、偉業について、栄光について……」（1908）の「青いマント」のパロディだという見解もある。（Ранчин А. Экзистенциализм по-русски, или самоубийство Серебряного века: «Распад атома» Георгия Иванова // Нева. 2009. №9. С. 194.）さらに、グミリョフの詩「あなたの青いドレスを見る……」（«Гляжу на Ваше платье синее...»）にも「青いドレス」というモチーフは現れており、多くの解釈の可能性がある。
- 17 プーシキンの詩より不正確な引用。（Комментарии, С.445, Марков, С. 226-227, Notes, The Atom Explodes, p. 411, Notes, Disintegration of the Atom, p. 23.）
- 18 原文は«дыр бу пыль убецур»で、アレクセイ・クルチョーヌィフのザーウミ（超意味言語）の詩より不正確な引用。（Марков, С. 227, Notes, The Atom Explodes, p. 411, Notes, Disintegration of the Atom, p. 236.）
- 19 アレクセイ・コンスタンチノヴィチ・トルストイの詩「騒々しい舞踏会の中で、偶然に」（«Средь шумного бала, случайно...»）（1851）のモチーフが用いられている。（Комментарии, С.445, Марков, С. 227, Notes, Disintegration of the Atom, p. 236-237.）
- 20 オシプ・マンデリシタムの詩「自由の薄明かり」（«Сумерки свободы»）（1918）より引用。（Марков, С. 227, Notes, Disintegration of the Atom, p. 237.）
- 21 「振り動かす」という意味の動詞「ラズマハーチ」（размахать）より。「チク」（-чик）は、その行為

- に関わる人、もしくはその動作を起こすものを表す接尾辞。
- 22 イワーノフの語り手によって生み出されたナンセンスであるとともに、クルチョーヌイフのザーウミとも呼応する。(Notes, Disintegration of the Atom, pp. 238-239.)
- 23 チュッチェフの詩「夢」(«СНЬ») (1830) のモチーフ。(Марков, С. 227.)
- 24 ロシア語で「それは我々に関係ない」という文で用いられる「関係する」という動詞 (касается) に、「噛み付く」(кусается) という動詞を入れ替えている。
- 25 プーシキンの詩「きらびやかな町、貧しい町 ……」(«Город пышный, город бедный…») (1828) より引用。(Комментарии, С.446, Марков, С. 227, Notes, Disintegration of the Atom, p. 239-240.)
- 26 アレクセイ・エイネルの詩「秋がやってくる。茂みが黄色く色づく ……」(«Надвигается осень. Желтеют кусты…») (1932) より引用。(Комментарии, С.446, Марков, С. 227, Notes, The Atom Explodes, p. 412, Notes, Disintegration of the Atom, p. 240-232.)
- 27 陳腐さを表す表現。チェーホフの『国語の教師』(«Учитель словесности») (1894) で広まる。(Марков, С. 227, Notes, Disintegration of the Atom, p. 242.)
- 28 タンプル塔はフランス革命の際、国王一家が幽閉された。ルビャンカにはソ連の秘密警察の本部があった。(Notes, Disintegration of the Atom, p. 243.)
- 29 ゴーゴリの『外套』(1842) のモチーフ。
- 30 ビョートル・ヴェインベルグの詩「彼は九等文官だった ……」(«Он был титулярный советник…») (1859) より引用。(Комментарии, С.446, Марков, С. 227, Notes, The Atom Explodes, p. 412, Notes, Disintegration of the Atom, p. 243-244.)
- 31 将校の娘とのエピソードは、ゴーゴリの『狂人日記』(1834) より。(Комментарии, С.446.)
- 32 この段落でも、ゴーゴリの『外套』と『狂人日記』のモチーフが混ざっている。(Марков, С. 227, Notes, Disintegration of the Atom, p. 244-245.)
- 33 プーシキンの『青銅の騎士』(1833) より引用。(Комментарии, С.446, Марков, С. 228, Notes, Disintegration of the Atom, p. 245.)
- 34 プーシキンのドンジュアンリストとは、プーシキンが作成した恋人のリスト。(Notes, The Atom Explodes, p. 412.)
- 35 クリミア半島はロシアのリゾート地として愛されてきたが、十月革命後、ソロフキ(ソロヴェツキイ諸島)はソ連最初の強制収容所となり、1930年代後半には劣悪な環境のなか多くの囚人が死亡した。
- 36 イワーノフは、1955年7月29日のロマン・ダリーへの手紙の中で次のように書いている。「『原子』は別の終わり方をすべきだった：『ハイル ヒトラー、諸民族の父、偉大なるスターリン万歳、決して決してイギリス人は奴隷にはならない!』と。止めしめて悔やんでいる。」(Иванов, Г. В. Избранные письма разных лет. М.: Берлин: «Директ-Медиа», 2016. С. 148.)